

教育学分野

第1節 教育学教育における学士力の考察

教育学は、学び、教えるという人と人との関係、さらには個人と社会との関係の中に存在する学問であることから、人間の発達と学習に関わる事象を考察し、人間理解、社会理解を深めることを通じて人類と地球社会の維持発展を支える人財の育成を使命としている。

教育は、生涯にわたって人間に関わる現象であり、万人がよりよく生きるための人間形成の営みであるとともに、社会全体を変容させる力を有しており、よりよい社会を実現するための人類共通の財産である。したがって、教育学を学ぶ者は、過去の知見を教訓とし、現在の事象を分析的に捉え、未来のあるべき姿を問い続け、理想の実現に向けて行動していく自覚と責任を持たなければならない。

このような背景を踏まえて教育学教育は、教育に関する知識や技術を習得するにとどまらず、その知見を他者に伝え、個人の発達から社会の発展まで主体的に関与する人間の育成を目指さなければならない。

そのためには、教育学の基礎知識と関連諸学問の知見を学び、複眼的な視点に立って自身の学びと教育の重要性を理解し、理論的・客観的に社会の課題を分析して社会の改善や発展に貢献できる能力を身につけさせることが必要である。

そこで、教育学教育における到達目標として、教職課程にとどまらない教育学の幅広い領域を想定し、以下の四点を考察した。

第一に学びの意義と教育の必要性を論理的、分析的に説明できること、第二に実態に応じた学びを教育として設計、実施、評価、改善のデザインができること、第三に直面する課題や問題に自らが積極的に関心を持つことができること、第四に教育学を学んだ者としての責任と義務について、その重要性を自覚できることとした。

【到達目標】

1 学びの意義と教育の必要性を論理的、分析的に説明できる。

ここでは、教育が個人の理解と社会の理解を形成する上で重要な営みであることを認識し、生涯にわたって教育が果たす役割を論理的、批判的に分析し、他者に説明できなければならない。そのために、教育学の理論や歴史、実践を踏まえて、家庭・学校・地域・職場での様々な教育的課題を題材にして教育の可能性と限界を考察できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

教育哲学、教育倫理、教育原論、教育史、教育思想など

【到達度】

- ① 学ぶということについて、以下の段階で論理的に説明することができる。
 - (A) 自らの教育体験、教育を受けた体験の両方から学ぶことの自分なりの意義を具体的に説明できる。
 - (B) 学びに関する学問的な裏付けを、教育学に関する様々な文献や資料を用いて論理的、分析的に説明できる。さらに、過去の教育実践や教育思想に学び、教育の現代的課題への教訓として用いることができる。
 - (C) 自らが所属、もしくは今後所属する予定の集団にとっての意義のある学びというのはどういったものを論理的に説明できる。
- ② 学びの意義、教育の必要性を他者に伝えることができる。
- ③ 自ら学ぶ力を持ち、課題解決ができる。

【測定方法】

- ①は、上記の（Ａ）～（Ｃ）の各段階をそれぞれ論述または発表させることにより確認する。（Ａ）はその具体性、（Ｂ）は学問的裏付けの論理性、（Ｃ）は自分が所属する予定の集団の関係者と交えるなど、他者の評価を踏まえた上で確認する。
- ②は、学んだことを理解した上で、ディスカッションやディベートなどを通して自分の意見を述べさせることにより確認する。
- ③は、自ら研究テーマを設定し、その解決に向けて取り組ませ、卒業研究、ゼミ論などの成果を発表させることにより確認する。

【到達目標】

2 実態に応じた学びを教育として設計、実施、評価、改善のデザインができる。

ここでは、学修者の意欲・能力を発揮させるために、教育と学びの現場においてその実態を正確に把握し、目的に応じたより適切な方法・手段を追求できなければならない。そのため、学びの過程の分析やシミュレーションを通じて、PDCAサイクルを用いた教育システムを構築する力を身につけさせることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

教育心理、臨床教育、教育内容、教育方法、教育工学、教育メディアなど

【到達度】

- ① 学修者の意欲、能力などを多面的、客観的に把握することができる。
- ② 学修者の実態に即した学修目標や学修方法のデザインについて論理的に説明できる。
- ③ 学修を効果的に進めるために、教育指導の理論と技術を活用できる。
- ④ 学修過程で他者の意見を聴き、自らの実践を反省し、改善案を作成することができる。

【測定方法】

- ①は、模擬的な学修場面を想定したロールプレイングなどを用いて把握の度合いを自己・他者評価させることにより確認する。
- ②と③は、実際の学修場面を想定した学修計画案を作成させることにより確認する。
- ④は、学修実践記録、改善案などを作成させることにより確認する。

【到達目標】

3 直面する課題や問題に自らが積極的に関心を持つことができる。

ここでは、学修者自身が、変動する社会に常に関心を持ち、個人及び社会に現出している様々な問題を教育という側面から捉えて、問題解決にどのように貢献できるかを考察できねばならない。そのため、教育の現場に立脚した実践的経験や他の学問分野の知見をも含め、より広い視点から現実の教育課題を分析し、解決策を提案できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

教育社会学、教育行政、教育行政、比較・国際教育、生涯学習、臨床教育学など

【到達度】

- ① 教育に関する時事問題について常に関心を持って考えることができる。
- ② 地域社会、グローバリゼーションなど広い視点から教育問題を理解し、分析できる。
- ③ 現代の教育課題について自分の考えを示すことができる。

【測定方法】

- ①～③は、変動する社会の教育課題について、ディスカッション、フィールドワークや教育ボラン

ティアなどを通じて問題の所在を分析し、自分の考えを示せるかどうかを論述形式、観察法などにより確認する。

【到達目標】

4 教育学を学んだ者としての責任と義務について、その重要性を自覚できる。

ここでは、教育が次世代にわたって個人や社会に影響を及ぼすことに鑑み、教育学を学んだ者としてよりよい未来の創造に積極的に関与する態度を身につけさせねばならない。そのためには、自ら学び続ける中で省察し、様々な場面で教育の重要性を伝え、個人の発達から社会の発展まで主体的に関与できることを目指す。

【コア・カリキュラムのイメージ】

教育法学、教育哲学、道德教育、生涯教育、教育行政学など

【到達度】

- ① 日々の生活において教育学を学んだものとしての自負を持ち、学び続けることができる。
- ② どのような職種においても教育の重要性を踏まえて社会生活を営むことができる。

【測定方法】

- ①と②は、卒業後の進路においてどのように大学で学んだことを活かしていくか、将来像をレポートにまとめ発表させることにより確認する。

第2節 到達目標の一部を実現するための教育改善モデル

教育学教育における教育改善モデル【1】

上記到達目標の内、「学びの意義と教育の必要性を論理的、分析的に説明できる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ② 学びの意義、教育の必要性を他者に伝えることができる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

学びの意義や教育の必要性を他者に伝えるためには、受動的な暗記学修から脱し、多面的な考え方や異なる意見を知り、自らの体験を踏まえた学びの意義を学問的な裏付けを持って、論理的、分析的に説明できる力を身につけさせることが重要である。

ここで提案する授業では、課題探究や自律的な調べ学修、討論や意見発表などを通じて、消極的な受け身の学びから主体的な学びへの転換を図り、学びの意義と教育の必要性を論理的に他者に説明できる能力を身につけることを目指す。

2.2 授業の仕組み

ここでは、初年次からの教育を想定しているが、卒業までの期間を通じて学びの定着を図るため、授業終了後もネット上で学生の理解度に応じた学修の場を提供する。そのために担当教員及び上級学年生・大学院生などのファシリテーター*がネット上できめ細かい学修支援を行う。その上で、ネットを通じて他大学の教員や学生、社会人などとのフォーラムを形成し、外部の評価を受けることで振り返りを行い、発展的な学修に結び付ける（図）。

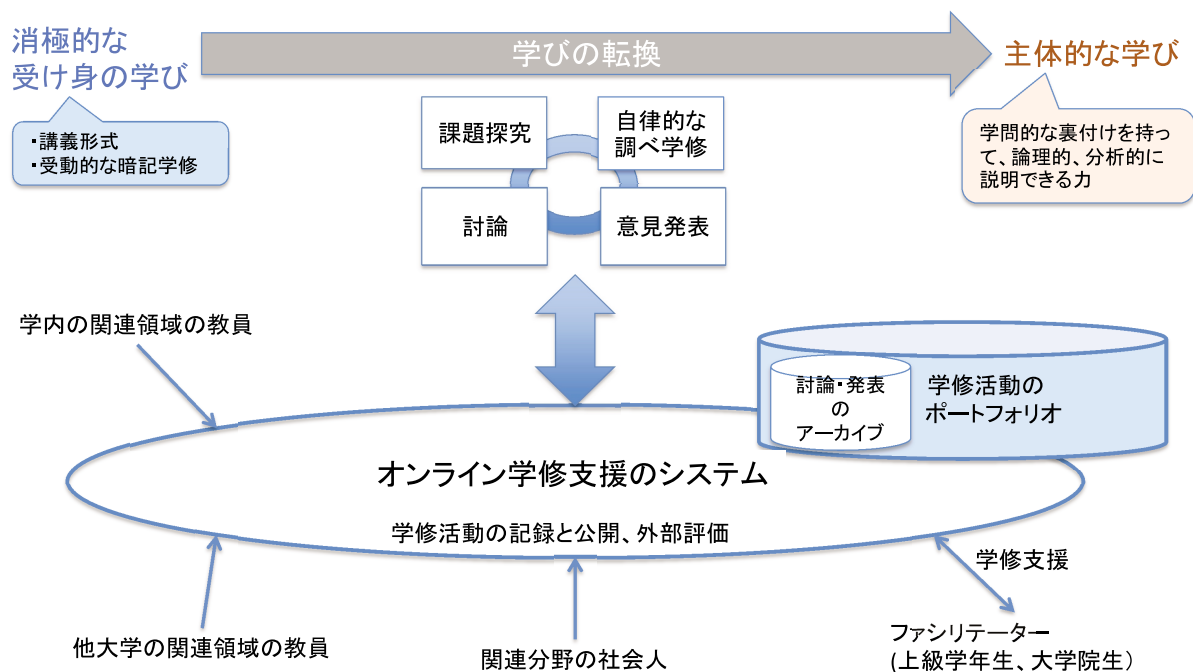


図 授業の仕組み

2.3 授業にICT※を活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 公共機関のホームページなどを通じた幅広い情報を収集することに慣れさせるため、学生自身がクラス全体に役立つ新情報を紹介するフォーラムの場を用意しておく。
- ② 自身で調べて発表する習慣を身につけさせ、知的充足による視野の拡大を探究する動機付けを強めるため、毎回、学修支援システム※上で事前に各グループ活動に対するコメントを与える。
- ③ 発表はデジタル動画で記録し、クラス全体が再視聴できるようにすることでグループ間での学修プロセスを共有し、学びに活かせるようにする。
- ④ グループの発表やクラス討論などに対する評価を学修支援システムの投票機能を利用して実施する。投票結果は発表のデジタル動画とともにアーカイブ化し、その結果を学内または学外に公開することで、次の学びへの反省と改善・意欲につなげる。
- ⑤ 学びの結果をもとに、社会への関与を体現させるため、ネットを通じて他大学の教員や学生、社会人などとのフォーラムを形成する。

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① 教育実践や教育思想を通じて社会に変革を与えた人物や事柄として、例えば「学び方を学ぶとは何か」などの調べ学修をグループで行い、資料収集や分析、考察、検証のまとめをする。グループ内の役割分担は、クラス全員が協調・協働学修できるように毎回変える。進捗状況を学修支援システムに掲載する。
- ② 学修支援システムや掲示板などで授業時間外も討論を行い、上級学年生・大学院生などのファシリテーターや担当教員がネット上で支援する。
- ③ 調べ学修の成果をクラスで発表し、相互評価を行うことで学びを確実なものにする。なお、グループによる発表をデジタル動画で記録してレジュメや評価を行うとともに、学修支援システムを通じてアーカイブ化し、学び合いを行う。
- ④ 評価は、思考力、判断力、資料収集の適切性、論述過程などの自己評価の内容と学修支援シス

テムのレポート、課題ペーパー、ノートその他学修履歴の整合性をもとに教員が行う。

- ⑤ 各グループの学修成果は学生の理解を得てネットを通じて社会に発表し、社会からの評価を受けることで振り返りを行い、発展的な学修に結び付ける。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① 学修支援システムの活用により、画像・動画・音響などを用いた表現力の向上と発表や討論の振り返りを効果的に行うことができる。
- ② ネット上でのファシリテーターによる学修支援を通じて教室内外におけるグループ活動が積極的になり、多面的で自律した学びが培われる。
- ③ グループの発表や相互評価などを通じて、他者への建設的な質問力が身につく、クラス全体の学びの質を向上させることができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 予習・復習や教室内外におけるグループ活動を積極的に行う学修支援システムが必要である。
- ② 学修を支援する上級学年生・大学院生などのファシリテーターの制度化が必要になる。
- ③ 学内外の教員や社会人との連携を図るためのコミュニケーションシステムが必要になる。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

当該授業の点検・評価・改善は、受講生による授業評価に加えて上級学年生・大学院生などのファシリテーターからの意見を聴取し、授業内容・運営方法について行う。当該授業終了後は、上位学年次の授業担当者と教育の重要性の視点に立った学びが持続されているか情報を共有し、他大学の教員や学生、社会人などの外部評価の結果を参考にカリキュラムを含めた見直しを行う。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 上級学年生・大学院生などによる学修支援を図るためのファシリテーターを大学ガバナンスとして、構築しておく必要がある。
- ② 学びの成果を評価し合うために、学内外の教員や社会人と連携したフォーラムやネットを通じての振り返りの仕組みづくりが必要となる。

教育学教育における教育改善モデル【2】

上記到達目標の内、「直面する課題や問題に自らが積極的に関心を持つことができる」を実現するための教育改善モデルを提案する。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 教育に関する時事問題について常に関心を持って考えることができる。
- ② 地域社会、グローバリゼーションなど広い視点から教育問題を理解し、分析できる。
- ③ 現代の教育課題について自分の考えを示すことができる。

2. 改善モデルの授業デザイン

2.1 授業のねらい

これまで行われてきた教育学の理論や歴史、思想などの教育に加え、地域社会やグローバリゼーションなどの視点から教育問題を理解し、分析できることが要請されてきている。

ここで提案する授業は、グローバルな視点から現代の教育課題を分析し、他の学問領域との関連性の中で理論と実践を結び付け、主体的・体験的な学修活動を通じて社会に関与できることを目指す。

2.2 授業の仕組み

ここでは、教育学の基礎的知識を修得していることを前提としており、大学3、4年次を想定している。授業では、対面またはネット上でのグループや協働での学修に加え、テーマに応じたフィールドワークや教育ボランティアなどを通じた体験的活動を行う。その上でテレビ会議などを利用し、他分野の教員や社会との意見交換を通じて外部からの評価を受けることで、振り返りを行い、より多面的に教育課題を考察できるようにする（図）。

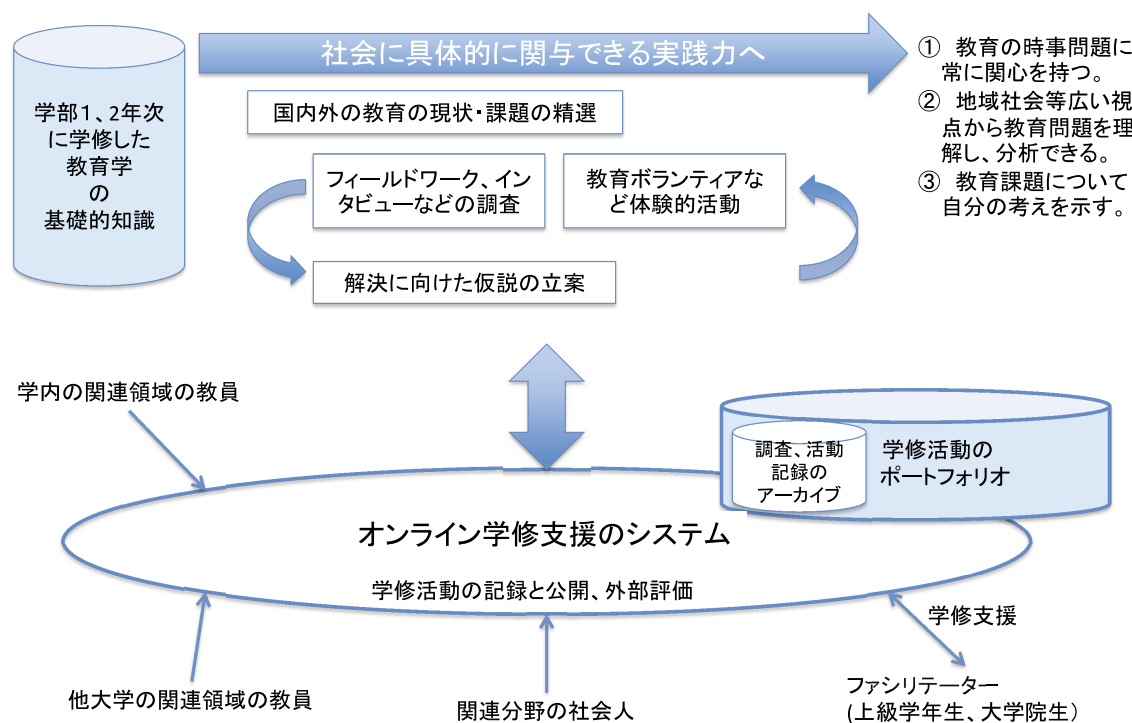


図 授業の仕組み

2.3 授業にICTを活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 基礎的知識の確認や補習に学修ポートフォリオ*やeラーニング*を活用する。
- ② 日本内外の教育の現状や問題点についてネットを通じて整理し、課題の洗い出しを行う。その際、上級学年生・大学院生などのファシリテーターがネット上で学びを支援する。
- ③ 関連する課題について、フィールドワークやインタビューなどの調査、教育ボランティアなど実践的活動を行い、ICTを用いてデータ化し、体験の共有化を図る。
- ④ より広い視野から課題分析を行うため、他の学問領域との連携をネット上で行う。
- ⑤ 対面やネットを通じて課題ごとにグループで教え合い、学び合いを行い、より多面的・多角的な知見を深める。
- ⑥ 学修成果をネットで公開することを通じて、外部からの意見や評価を受け、振り返りを行うことで社会への関与の在り方の提言につなげる。

2.4 授業にICTを活用した学修内容・方法

以下に学修内容・方法の一例を紹介する。

- ① ここでは、グローバル化などの広い視野から教育を考える。
- ② 国際的に教育問題を考えさせるために、PISAやIEAなどの国際学力到達度試験の情報や国策、制度、白書などを入手・分析させる。その際、分析の手法などをファシリテーターが対面

やネット上で支援する。

- ③ 対面やネット上でグループごとに、例えば教育と経済・貧困、学修障害などテーマを設定し、それに基づいた学修到達目標を立案させた上で、問題の所在を分析し、解決に向けての仮説を立てさせる。課題分析の際には、他国の事例や他の学問領域での知見を用いられるように学内外の教員やファシリテーターが支援する。
- ④ テーマに応じたフィールドワークやインタビュー、教育ボランティアなどを行い、学修活動記録は、ICTを用いて経験の共有化を図る。
- ⑤ 各グループの学修成果を対面やネット上で発表させ、他分野の教員や社会との意見交換を通じて、現代の教育課題を検証し、社会への関与の在り方を提言できるようにする。
- ⑥ 学生個人の到達度の評価は、グループ間の相互評価及び学修活動の内容を踏まえて教員が行う。

2.5 授業にICTを活用して期待される効果

- ① ネットを通じて学問領域を超えた学内外の教員や社会人の知見を得ることで、多面的な考え方を身につけることができる。
- ② フィールドワークで得た経験をデータ化することによって、経験の共有化が可能となる。
- ③ グループの発表や相互評価などを通じて、他者への建設的な質問力が身につく、クラス全体の学びの質を向上させることができる。

2.6 授業にICTを活用した学修環境

- ① 授業外での学修のために、電子掲示板を含む学修支援システムや学修ポートフォリオシステムの構築が必要である。
- ② 学内外の教員や社会人との連携を図るためのコミュニケーションシステムが必要になる。
- ③ 学修を支援する上級学年生・大学院生などのファシリテーターが必要になる。

3. 改善モデルの授業の点検・評価・改善

当該授業の点検・評価・改善は、受講生による授業評価に加えて上級学年生・大学院生などのファシリテーターからの意見を聴取し、授業内容・運営方法について行う。当該授業の実施前後に関連領域と他の学問領域の授業担当者との間で、理論と実践の結び付きができていないか情報を共有し、カリキュラムを含めた見直しを行う。

4. 改善モデルの授業運営上の問題及び課題

- ① 学内外の教員や社会人との連携を図るための協力関係を構築する必要がある。
- ② 体験的学修活動を受け入れてくれる教育機関との組織的な協力関係を構築する必要がある。
- ③ 対面やネットで授業時間外も学修を支援するファシリテーターを大学として制度化することが必要である。
- ④ 教室外の人々と交流する際の人権や個人情報の保護、文化や社会的マナーに関する配慮を周知徹底しておく必要がある。

第3節 改善モデルに必要な教育力、FD※活動と課題

【1】教育学教員に期待される専門性

- ① 人類と地球社会の維持発展を支える人財育成に強い使命感と倫理観を持つ専門家・実践家であること。
- ② 個人・社会の教育課題を総合的に捉え、理論と現場の関連付けに取り組めること。

- ③ 共生社会の実現に向けて教育学の観点からイノベーションを提案できること。
- ④ 生涯学び続けることの有用性を学生に気付かせ、興味を持って主体的に取り組ませられること。
- ⑤ ICTなどの教育技法を駆使して、省察型の教育ができること。

【2】教育改善モデルに求められる教育力

- ① 授業のカリキュラム上の位置付けを教員間で共有し、シラバス*の調整を行い、カリキュラムポリシーに沿った授業を実施できること。
- ② 一人ひとりの学生が主体的に学修できるよう、ICTを用いた自立学修や協働学修を適切に指導できること。
- ③ 上級学年生・大学院生、他大学の教員や社会人などの協力を得るためにコーディネートを行い、学生に発展的な学修を促せられること。
- ④ 学修ポートフォリオにより、学修成果を振り返らせ、学びの意義と教育学の必要性を関連付けさせられること。
- ⑤ ICTを用いて学修成果を隣接諸科学の教員や社会に発信し、評価やコメントを受けられるように支援できること。
- ⑥ ICTなどを活用して学生とのコミュニケーション、適切な教材作成、eラーニングが実施できること。

【3】教育力を高めるためのFD活動と大学としての課題

(1) FD活動

- ① 教員間で連携し、継続的に教育方針と授業内容・方法との整合性を検証・改善する必要がある。
- ② 学生観の変容に対応した指導法を探究するため、学生理解を教員間で共有する場を設ける必要がある。
- ③ 教育方法に関する研究会に積極的に参加し、学修理論に基づいて教員同士が教え合い、学び合うことが必要である。
- ④ ポートフォリオ及びグループでの学び合いや対話型授業などの指導法について、ワークショップを組織的に行う必要がある。
- ⑤ 外部評価による振り返りを行わせる指導法について、専門家を招くなどの研究会を実施する必要がある。

(2) 大学としての課題

- ① 授業の録画、教材コンテンツ、ネット上のディスカッションなどをアーカイブする必要がある。
- ② 学修ポートフォリオを活用した学修支援を実効あるものとするために、大学として組織的な取り組みと支援が必要である。
- ③ 関連分野の教員や社会の専門家などから協力を得るために、連携の呼びかけ、制度の整備及び財政的な支援を行う必要がある。
- ④ 学務系職員、ICT技術系職員の教育支援能力の開発と教員との連携の強化への支援が必要である。
- ⑤ 世界を視野に入れた教育の質保証を持続的に行う責任がある。